
夜空の下で君が。

刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜空の下で君が。

【Nコード】

N1671N

【作者名】

刹那

【あらすじ】

中2の春ー……。初めて、恋をした……。

上がり症の女の子、「仲村 涼香」はある日転校先で見つけた男の子に恋をしてしまう。

しかし、その相手は、まだ小学生だった？！

自分でもヤバイと分かっているのにつつい惹かれてしまう涼香。一方、中学校では、涼香に思いを寄せる男子も登場して……。

まだまだ初心者ですが、皆様が少しでも楽しんで頂ける様、頑張

ります！！！

小学生と中学生の、ほんのり切なく、ほんのり甘い、恋慕物です。

第一章 緊張気味の転校初日（前書き）

この小説を読もうとおもってくださった貴方！……！
どうも有難うございます……！……！

悪い点等がありましたら、打たれ強いので、どうぞピシバシバご指
摘下さい……！……！

それでは、どうぞ……！……！

第一章 緊張気味の転校初日

「……まさか、こんな形の初恋をするなんて、夢にも思っ
ていなかった。」

「……そう、中2の私が、小学生に恋しちゃうなんて……。」

「……事の起こりといえばあれは一週間前だった気がする。」

寒川から茅ヶ崎に引越して来た私、「仲村 涼香」（なかむ
ら ずずか）はいろんな不安を抱えながらも、近所にある「南浜
中学校」（みなみはまちゅうがっこう）へ行く事になった。

転校初日、上がり症な私は、めちやくちや緊張しながらこれから
新しい生活を送る事となる、「2年A組」へと向かった。

その前に、校長先生からの話しなんかもあったけど、覚えている
のは先生の頭がちょっとハゲていたっていう事ぐらいだ。

「……強張った表情で、廊下を歩いていると、優しそうな女の人の
声が、となりから聞こえて来た。」

「仲村さん？……大丈夫？具合悪いの？」

「……この人は……。……そうだ、担任の……ゆきむらせんせい幸村先生だっ
け……？」

「……あ、は、はい。……た、多分、大丈夫だとおもいま
す。」

何て言えばいいのかよく分からなくなり、そんな風な言い方をして
しまった。

「そ、そう？それならいいんだけど……。」

相変わらず心配そうな声をあげる先生。

優しい人だと言う事は、一目で分かった。

そんな会話をしているうちに、「2-A」と書かれた看板が私の

目にとびこんできた。

ドクン

ドクン

鼓動が、大きくなっていく。

もう帰りたいという気持ちが強くなっていく。

このまま「グッバイ！」と言って走り抜けていけたら、どんなに幸せだろう……。

……大きく息を吸って、また大きく吐きかえず。

さつきよりももっと鼓動が強くなる。

だんだん顔が熱くなっていくのを感じながら、また深呼吸を試みる。

あ……や、ヤバイ……。

無理……。本気で帰りたい！！！！……先生！！ちょっと待って下さい！！！！

ちよつと休憩さしてください！！！！

……そんな思いを抱きながら先生の方をちらりと見たが、幸村先生はそんな私の気持ちなんて全く無視して、

「じゃあ、私が「入って来て。」って言ったら入るのよ。皆優しいから、大丈夫。安心して入って来てね。」

とだけ言って、教室のドアを普通に開け、中へ行ってしまった。

……ドクン

ドクン

心臓が飛び出しそうになってくる。

入る前からこれなのだから、勿論入る時なんて発作を起こしかけるぐらいになるだろう。

幸村先生の声がドアの向こうからちよつとだけ聞こえて来る。

ざわつく生徒達。

さらに幸村先生が何かを話している。

・・・ひよつとして、私の事だろうか・・・。

「皆さん、今日は転校生が来ますよ。」

なんていつているに違いない。

そんな事を考えていると、いきなり目の前のドアが開いた。

「わー!!」

つい、声をあげてしまう。

「?・・・あ、あの、仲村さん・・・?呼んだんだけど・・・早く、入って来て・・・。」

幸村先生の、迷惑そうな様な、困っている様な、微妙な顔。

・・・あれ、もしかしてさつき先生が何か喋ってたの、あれ、私を呼ぶ声だったの・・・?!

「え???!あ、す、すみません!!!」

急いで教室に入る。

勢いで入った為、思ったよりは緊張せずに教室に入れた。

・・・と思ったが、やっぱり駄目・・・。

緊張と不安で、胸がいつぱいになってくる・・・。

・・・息が辛い。

めまいがしてくる・・・。

・・・なのに幸村先生は、私を教卓の前まで連れて来て、

「はい。それじゃあ名前と軽い自己紹介をして頂戴ね。」

なんて言葉を口走った。

おいおい先生!!!そりゃ無いでしょ!!!

本気でそうつつこむ。

緊張の嵐の中、目の前の生徒達に少し目を向けてみる。

・・・全員私の方向へ目を向けている・・・。

・・・もう、駄目だ・・・。

そう思いながら喋らないでいると、幸村先生が私の不安をさっしてくれた様で、

「…………えー…………。寒川から引越して来た「仲村 涼香」
さんです……。字はこう書きます。」

……と言って、黒板に「仲村 涼香」と綺麗な字で書いていっ
た。

「…………お、お願いします…………。」
私は精一杯の勇気を出して、その一言を発する。

「皆さん、仲良くして下さいね…………それじゃあ、席は……。」
と、幸村先生はそう言って、私を一番後ろの窓際の席へ案内してく
れた。

私が生徒達の間を通るだけで、皆は私の方を珍しそうに眺める……。

……私はそんな視線を浴びながら、案内された席に座った……。

…………緊張と不安が溢れる中、私の新生活が、今、始まった……。

……席に座ったはいいものの、生徒達の注目の視線はまだ私の方
へ向いていた。

(何でみるの……!!!)

と心の中で半べそをかく私。

座ったからとはいえ、緊張が消える分では無い……。

私は回りを少し見回しながら、ゆっくりと呼吸を整えていった。

そんな風におどおどしていると、隣から声が聞こえてきた。

「ねえ、なんで引越してきたの？」

いきなり声を掛けられた私は、とりあえず反射的に隣の方をむいた。
するとそこには人懐っこそうな可愛い感じの男子が、ニコニコして
私の方を見ているではないか!!。

「…………え、え…………!?!」

突然の事で動揺する私。

上手く喋りたいのに舌が回らない。

「……緊張してる？」

その人が話しかけてくる。

とりあえず私は必死に何度も頷いた。

「……やっぱり、転校初日だもんね。」

「……何だかけっこう良い人そうな感じ。」

「う、うん。わ、私、凄じ上がり症で……。」

その人のほんわかオーラーのおかげか、少し喋る事が出来た。

「そうなんだ。……あ、御免、俺、「滋賀 正人」（しが

まさと）っていうんだ。よろしく。」

その人……じゃなくて、正人という人が喋る。

その可愛い顔で「俺」と呼ぶのには少し違和感があったが、気にせず、

「そ、そうなんだ……。あ、わ、私は「仲村 涼香」。

宜しく……。」

と頑張つて自己紹介までした。

「あはは、それ、さっき先生が言ってたじゃん。」

正人が笑う。（「正人って人」だというのがめんどくさいので「正人」と呼ぶことにする。）

……そういえばそうだったと気が付いて、頬が火照った。

「はい。皆さん。それじゃあ一時間目の数学が始まります。準備をしておいてくださいね。」

幸村先生の声。

幸村先生が出て行った後、ちょっとごつい感じの男の人が教室に入ってきた。

（……え、もしかして、この人が数学の先生なの?!）

いかにも体育系な感じがしたのに以外にも数学だったので軽い衝撃をうける。

そんな戸惑った私の顔を見て、正人がクスリと笑った。

「・・・あ、やっぱり。あの人、数学の先生つぱく無いよね。」
「・・・やはり、他の人もそう思っていたらしい。私も小さく笑い返して、」

「・・・うん。」
と言った。

「・・・だいぶ、緊張が解けてきたのが自分でも分かる。
正人のほんわかオーラーが私の心を解してくれた様に感じた。」

最初はどうなるのかと思ったが、いきなりいい感じの人が現われ、私はとりあえず安堵の息をついた。
これからどうなるのかは分からないけど、何とか楽しくやって行けそうな気がする。

そんな小さな希望を持ちながら、私は教科書を開き、黒板の方へ目を向けた。

第一章 緊張気味の転校初日（後書き）

・・・どうでしたか？

よろしければご感想御願います！！

第二章　いきなり大失態？！　（前書き）

ついに第二話です！！

ぞろぞろー！！　> ^

第二章　いきなり大失態？！

はらはらと少し儂げに散る桜を横目で見ながら私は大きなあくびをぐつと我慢した。

(・・・ヤバイ・・・。ヤバイぞ・・・)

予想以上の授業のつまらなさ。

前にいた自分の学校ではもう少し面白かった気がする・・・。
長々と語る先生の低い声。

何も言わずにただひたすら手だけを動かす生徒達。

(・・・ちよつと！皆、真面目すぎでしょ！！)

勿論、クラスが五月蠅過ぎるのを望んでいる分では無いけど、この時間がこれから毎日、しかも六時間ずつあると思うと涙が出そうだ。

さらに「もう一つの敵」が私の前に表れる。

・・・そう・・・。「睡魔」だ・・・。

じわじわと私を追い詰め、瞼を重くさせていく・・・。

甘い誘惑の音が聞こえてくるかの様だ・・・。

「楽しい夢の国へゆこうよ。」・・・と。

その、ピーターパンの様な楽しい睡魔の声に、抵抗していた私だったが、この状況といい、私の反抗HPは赤くなり、点滅状態だった。

(ああ・・・もう、駄目・・・)

そしてそのまま、私は打ち撫せになって、寝た・・・。

—————。

「・・・さん・・・。」

「・・・むらさん・・・。」

・・・誰かが私を呼んでいる・・・。

だけど、もうちよつと寝かせて欲しい・・・。

「うん。あとちよつとだから。」

・・・そう答える。

・・・かすかな笑い声が所々から聞こえて来たが、私はそれ無視してまた夢の世界へ戻ろうとした。

・・・しかし、まだ声は私を呼ぶ・・・。

「・・・て・・・」

「おき・・・」

・・・だんだんイライラしてくる。

人がせつかく寝ているのだから、静かに寝かせて欲しい。なのに、まだ声は止めない。

イライラが限界になった私は、

「安眠妨害は止めて下さい!!!」

と、イラついた声で言い放ち、右手でしっしと追い払った。

・・・途端に聞こえてくる大きな笑い声。

はっと顔をあげると、そこは教室だった。

「・・・え？え？」

動揺して辺りを見回す。

そこには、顔、顔、顔・・・。

隣を見ると、苦笑中の正人の顔。

・・・も、もしかして・・・。

・・・そうだ・・・。ここは教室だった・・・。

私、あのまま寝ちゃったんだった・・・。

しかも、そんな私を正人が起こしてくれたっばい?!

・・・だんだん、恥ずかしさがこみ上げてくる。

さっきまでの眠気さなんていつの間にか吹っ飛んでいた。

(・・・や、やばい・・・)

・・・そんな事を思っていると、正人が声を掛けてきた。

「・・・あの・・・さ、授業、終わったよ。」

「・・・う、うん。有難う、教えてくれて・・・。なのに、なんか済みません。「安眠妨害だ」とか言って。」

「いや、気にしないで。」

正人の言葉に、「良い奴だな〜」と思うのと共に、今さっきの忌まわしい出来事を思い出す。

さっき言ってしまった自分の台詞が恥ずかしい。

しかも、転校初日に、

穴があつたら入ってしまったいたいほどの恥ずかしさ。

後悔の念が渦となって押し寄せてきた。

(・・・も、もう嫌〜〜〜)

・・・笑い声はまだ収まらない。

行き場の無くなった私は、ただその場で座っている事しか出来なかった・・・。

・・・やつと笑い声が収まり、代わりにクラスの女子が(あと数人男子がこっそり紛れ込んでいた。)私の周りに集まって来た。

・・・またもや、上がり症復活・・・。

さっきの失態もプラスになって、私はカチンコチン状態・・・。

(ああ・・・誰か・・・助けて・・・)

・・・しかし、助けしてくれる人なんて居る分も無く、女子達は私に凄い勢いで話しかけてきた。

「仲村さん、さいこー！！！やばい！！まだ笑えるんだけど！
！！！！」

「わ、近くで見るとさらに可愛い！！・・・男子達もいる仲村さんの事言ってたよ！！！！」

「おい！！何言ってたんだ！」

「ねえねえ！！仲村さんは好きな人いんの??？」

「何型ー????」

「誕生日は？」

「痛っ！誰か私の足踏んだでしょ！！！！」

「仲村さん！！付き合って！！！！」

「おい、何言ってたんだ！！！！それなら俺も！！！！」

「御免、こいつらバカだから。」

「・・・おい、なんでお前だけ良いポジションとってんだよ!！」

「・・・仲村さん!私、愛莉っていうんだ!宜しく!！」

「仲村さん・・・」

「仲村さん・・・」

(・・・。す、凄いテンション・・・。)

さっきまであんなに静かだったのに・・・。

私はクラスの人達の圧倒的な押しかけにより、もうどれから答えればいいのかも分からない状態で、ただ呆気に取られているだけだった・・・。

「はい。皆さん、座って。授業、始まるわよ。」

幸村先生の優しい声つつ!!!

ああ、救世主!!!!!

・・・しかし、皆はそんな声も聞こえなかったかの様にまだ私に話しかけている。

「・・・皆!?!早く座って!?!」

幸村先生の必死な呼びかけ。

・・・それからそれを5・6回繰り返して、やっと皆はしぶしぶと席に座った。

・・・そして、私はさっきと同じ様にこの時間も、睡魔と闘い続けた。

・・・鐘の音が、教室に響き渡る。

何とか睡魔に打ち勝った私はその鐘の音を聞いて、パアッと明るくなった。

(これで、HP回復!!!!!)

だんだんと元気がこみ上げてくる。

・・・皆もそうだったらしい。

さつきまでの静けさとは裏腹に、バツと、勢いよく顔を上げて、席から立ち上がった。

「・・・そう、今からお昼タイムなのだ!!!!!!」

次々とクラスの人達はグループを作り、自分の机や椅子を移動させ始めた。

（・・・私は・・・一人か・・・まあ、転校初日だし!!そんなの当たり前だよね・・・!!）

そう自分で自分を慰めて、一人、お弁当箱を開いた。・・・と思ったその時、近くから可愛い声がした。

「ねえ、仲村さん!一緒にうちらと食べよーよ!」

「・・・え・・・」

・・・一瞬、動揺する。

その子の方を向くと、女の子は私の動揺した表情を見て、こういった。

「ん?・・・あ、御免、うちの事知らない?」川内 愛莉「かわうち あいり!」っていうんだけど。」

・・・その名前、なんか知っている・・・。

・・・自分の頭に「なんだったのか思い出すんだ!!」といいながら、記憶をさぐる。

そして、やっと思い出した。

そうだ!さつき話しかけてきた女の子の一人だった!

「・・・」

思い出したのは良いんだけど、緊張して、何もいえない・・・。そんな私を見て、愛莉が言った。

「・・・あ、嫌ならいいんだよ?・・・無理にとは言わないし。」

「・・・え、嫌・・・そうじゃなくて・・・」

・・・こんな時に自分の上がり症に対して腹が立ってくる。

「うん!!食べたい!!」って、言えば良いことなのに、何で上手く喋れないんだろう・・・。

・・・でも、今は、自分に腹を立てている場合じゃ無い!!

せつかく誘ってくれているんだ!!

勇気を出せ!!自分!!!!

・・・私はそう自分に言い聞かせ、何とかその気持ちを声にだした。

「・・・一緒に・・・食べたい・・・です。」

すると、愛莉達のグループは

「うん!良かった!!それじゃあ、食べよ!!」

と言って、私の手を引っ張り、

「ほらここに座って!!」

と、グループの中に入れてくれた。

「・・・は、はい!!」

私はそんな堅苦しい言葉を使いながら、3人のグループの中へ入っていった。

友達がさっそく出来てしまった私。

何だか事が上手く運ばれすぎな気もするが、そんな事はどうだっていい!(自分で考えていたクセに・・・。)

とにかく!今やるべき事は、この「愛莉」って子達と仲良くなる事なのだから!!

第二章　いきなり大失態?!　（後書き）

・・・どうだったでしょうか？

ちなみに、自分的には、予想以上に転校初日に時間をかけすぎてしまっているな・・・と反省中です（汗）

なるべく早く主人公を登場させるつもりですのでもう少しお待ち下さい!!

すみません！（汗）（って、「汗」多っ！（汗）（

第三章 乙女トークと帰り道（前書き）

この章で転校初日はついに終わりです!!

長々とすみませんでした（汗）

・・・それではどうぞ!!

第三章 乙女トークと帰り道

・・・あの後、私と愛莉達はけっこう仲良くなった。とりあえず、まとめてそれぞれの紹介をしよう。

まず、凄く美人で、黒髪が似合う女の子、「黒崎 美春」（くるさき みはる）。

けっこうクールで、あんまり喋らない。

・・・次は、茶髪で元気な女の子、「明石 夏帆」（あかいしかほ）。

趣味は写真を撮る事らしい。

最後は、ご存知の通り、「川内 愛莉」。明るくて、誰とも壁が無い女の子。

ちなみに容姿も普通に可愛くて、髪の毛は茶色と黒が混じった様な色をしている。

・・・と、まあ、簡単な説明が終わった所で、今の私の現状に移りたいと思う。

・・・今、私は愛莉達と下校中。

それも、恋話をしながら。

「・・・ねえ、涼香ちゃんには言ってなかったけどね、うちの好きな人・・・。「し・・・。「なの・・・。「きゃー言っちゃった!!」

・・・愛莉が恥ずかしそうに言う。

勇気を出して言ってもらった愛莉には悪いが、肝心な名前の方が聞こえなくて、「し」っていう所は聞こえたけど、「私は「え?」と聞き返してしまった。

「・・・もー・・・。ちゃんと聞いてよ〜」。

愛莉がちよつと恨めしそうに私の方を向いた。

「御免ね・・・」

私が言う。

愛莉達の前では段々普通に接しられる様になった私。(といってもまだ完全に上がり症が無くなったわけでは無いけど。)

「・・・少しずつ進歩(?)してきているのだ。」

「・・・だから・・・正人君だってば!!」

愛莉が顔を赤くしながら言う。

自分の知らない人かと思っただのに、以外に知り合い(?)だったの
で、ちよつとビックリした。

「・・・正人・・・君・・・か。へえ・・・」

普段、(というか、心の中では)「正人」と呼んでいたの、
実際に声に出してみるとなると、何と無くむず痒い感じがする。

「・・・うん。・・・といっても、あんまり話さないし・・・」

正人君、モテるから多分うちの事なんて全然意識して無いと思うけ
どね・・・」

愛莉が少し寂しそうに言った。

その表情は、普段(と言ってもまだ一日しか経って無いけど。)見
たことも無い様な「女の子の顔」で、愛莉が何だかすごく大人っぽ
く見えた。

「・・・そうなんだ・・・」

「・・・うん。うち、正人君ともつと話したいんだけど、なんか
正人君だけ意識しちゃうの・・・」

「・・・愛莉は誰とでも屈託も無く話せる子だと思っていたのに、何だ
か以外の発言。」

やっぱり私は恋する女子の気持ちがよく分かって無いみたいだ。

(意識しちゃう・・・って事は、私みたいになっちゃうって事?それ
も正人だけに?・・・でも、正人は話しやすいと思うんだけどな・・・
。なんでなんだろう?)

乙女心の全く分かっていない私は、そんな疑問を持ちながらも、

「大変なんだね・・・」

と、とりあえず言っておいた。

「うん・・・頑張っていきたいと思ってる!・・・で、涼香ち

「やん……。頼みがあるんだけど……。」

「愛莉が少し私の方へやって来て言った。」

「……。涼香ちゃん、正人君の隣でしょ……。？だからさ……。」

「

「……。あ、うん。恋の手伝いだよね？」

「大体女の子が恋話をするとなるとこのケースばかりなので、今までの経験上、私は先読みしてそう言った。」

「そうなの！さり気無くでいいからさ。お願い！！」

「愛莉が片目をつぶって顔の前に両手を重ねた。」

「うん。勿論。」

「そう言っつて小さく笑ってみる。」

「愛莉はそんな私を見て、」

「有難く助かるよ。」

「とホツとした様な笑顔で言った。」

「……。それで……。美春ちゃんにもやっぱり好きな人は……。いるんですか……。？」

「最後の方は少し敬語になってしまったが、初めて自分から友達に話しかけてみた。」

「……。実はクールな感じの美春に少し興味を持っていたので、好きな人がいるのかどうか気になっていたのである。」

「……。しかし、美春はこちらに顔も向けずに」

「いるけど、教えない。」

「と言った。」

「……。当たり前前の答えだったが、軽くショックを受ける。」

「（……。あ、やっぱりまだ一日しか経ってないもん……。信頼はされていないに決まってるか……。）」

「……。人と壁を作らない愛莉と話していた為、けっこう自分は受けいられていると思っっていたさっきまでの自分が恥ずかしい。」

「……。ここ、私の家だから……。じゃ。」

「美春はそう言っつて、薄い青色をした家（いかにも美春らしい感じ。）」

へ入って行った。

「うん！また明日ね〜！」

愛莉が言い、大きく手を振る。美春も軽く振り返り返して、ガチャンとドアを閉めた。

「・・・その後、夏帆とも別れて、私と愛莉は二人つきりになった。

「・・・あのさ、さっきの美春の事だけ・・・。」

愛莉が急に話を持ち出して来る。

本当に唐突だったので、軽く驚いた。

「美春は、そっけなく言ってたけど、初めて会った人に好きな人がいるって教えたの、今まで一度も無かったよ。だから、「信頼されてない」とか、そういう事は無いと思う。」

「・・・え・・・？何で・・・。」

「・・・美春に「教えない」って言われた時、涼香ちゃんちよつと寂しそうだったでしょ？だからそうなのかな〜って思ってた・・・。」

「・・・余計なお世話かもしんないけど。」

愛莉が少し笑っていった。

「・・・けっこう鈍感な子だと決め付けていた為、その鋭さ（？）

はなかなか意外な一面だった。

「・・・うん。教えてくれて、有難う・・・。」

そう言っつて、ちよつと笑い返してみた。

愛莉も、それを聞いて安心した様に笑った。

「・・・いえいえ・・・あ、ねえ、そういえばさ・・・。」

「・・・と、また話を変えて、さらに話し続ける。

「・・・涼香ちゃんつてさ、好きな人いるの??？」

「・・・ううん。・・・居ないんだよね・・・。」

「へえ・・・。え、でもさ、初恋はもうしたよね??？」

何年生の頃した??？」

「・・・嫌・・・そ、それもまだ・・・。」

「・・・え・・・。」

「・・・うう・・・。何だか気まずいフィンキ・・・。だから恋話は嫌な

んだ〜・・・。

「・・・ほ、本当に一度も無いの?!・・・せめて気になる人とか・・・。」

「気になる人か・・・。うん、無いかな・・・。」
アハハ・・・と苦笑いしてみたが、愛莉は「んなバカな・・・。」と言わんばかりのビツクリ顔・・・。

(・・・そんなに驚く事かな・・・。)

と、少し疑問に思ったが、まあ、確かに前の学校でも好きな人がいない女子はほとんどいなかったなあ、と思い出し、愛莉が驚くのも無理は無いかと考え直した。

「・・・つて、あ!!!ここもう、うちん家だった!・・・それじゃあまた明日ねっ!!!」

しばらく小さな沈黙が続いたが、愛莉の家がすぐ近くにあった為、気まずい状態にまではならなかった。

「・・・そして、愛莉とも別れた私は、家までの道を歩きながら、
「・・・。また、明日」、・・・か・・・。」

と、呟いてみた。

何だか新鮮な感じで、変にムズムズした。
・・・でも、嫌じゃ無いムズムズ感だった。

――夜――

春の夜風が部屋の窓から吹き込み、私の髪を小さく揺らした。

お風呂からも出て、歯磨きも済ました私は今、自分の部屋のベツトに寝っ転がっていた。

天井を見つめながら、何と無くボーっとしてみる。

(・・・。今日は・・・。いろんな事があったなあ・・・。)

転校初日に、いきなり友達も出来て、恋話なんかもして、隣の男子

とも仲良くなつて・・・。

・・・なかなか充実した一日だったが、その分いつもより心身共に疲れていた。

ふいに息を吸ってみると、新しい木の匂いと、春の香りがした。

・・・時計に目を向けると、短い針は「9」を、長い針は「5」を指していた。

こんなに早く寝るのは久しぶりだな、と思いながら、私はベットから起き上がり、電気を消した。

月の微かな光を感じながら、私はゆっくりと目を閉じる。

すぐに、真っ黒な闇が押し寄せてきて、私はそんな闇の中へ、深く沈んでいった・・・。

第三章 乙女トークと帰り道（後書き）

・・・どうだったでしょうか・・・？

とりあえず、ここで転校初日は終わりです！

次回はついに主人公登場！！

「やほー」な気分ですww

という事で、早く次回が書きたくてウズウズしています

ここまで読んでくださって、本当に有難うございます（感謝）！！

感想等を下されば、私も書いてくれた方のところへ行って、感想書きますよー。〜

第四章 ゴミ捨て場でまさかの出会い（前書き）

遅くなってすみません（汗）

それから、ついにこの章で主人公登場です

・・それでは、第4章です^^

第四章 コミ捨て場でまさかの出会い

・・・転校初日から6日間が過ぎた。

ちなみに、今日は土曜日。

他の子達は部活で青春してるけど、今の私はまだ部活が決まっていないので自分の部屋でごろ寝状態・・・。

まあ、それはそれでいいんだけど。

・・・そんな風にごろごろしていると、階段の下（私の部屋は二階にあるので。）から、お母さんの声が聞こえた。

「涼香ー！ごみ捨ててきてー。」

・・・全く・・・。何で私が・・・？

・・・引越してきて始めての休みなんだから・・・今日ぐらい休んでもいいじゃんか。

「・・・えー、ちょっと今忙しいからー。悪いけど無理ー。」

そう嘘を吐いて、近くにあった雑誌を手取る。

すると、お母さんが言い返してきた。

「何いってんの。どうせ雑誌でも読んでるんでしょー？」

・・・ギクリ・・・。さすがお母さん・・・私の行動パターンを知ってるな・・・。

「・・・そ、そんな事無いって！・・・今、勉強してるのー！」

それでもさらに言い訳をする私。

すると、お母さんはあまりに私がおねるので、

「・・・涼香！いい加減、言い訳はやめなさいよ。」
と言ってきた。

・・・この人は、私が雑誌を読んでいる事になんの疑いも無いんだらうか・・・。

・・・まあ、確かに読んでるけど・・・。

・・・これ以上ごねていると、お母さんが本気で怒って、なが〜いお説教タイムになってしまうので、仕方なく私は、

「・・・分かった・・・。行ってくるよ・・・。」
と言って、階段を下りた。

「そうそう。最初からごねてないで、そうしてれば良かったのに。・・・それじゃあ宜しくね。」

お母さんはそう言って、重たそうなごみ袋をふたつ、私に渡した。

「・・・分かったよ・・・。」

そうしづぶ引き受けて、袋を片手で受け取る。

・・・以外に重くて、受け取った右手がずんつと沈んだ。

「・・・な、何入ってるの・・・。これ・・・。」

ちよつと聞いてみる。

「・・・あんたの力が無いだけよ。・・・入ってるのは毎日の夕飯の生ごみとか。」

「・・・私の筋力は人並みだよ。・・・これを毎週持つてるお母さんが以上なの。」

そう言って、よたよたとした足取りで玄関まで行き、「行ってきまーす・・・。」とドアを開けた。

・・・外は目が眩む程の快晴。

今は春だというのにけっこう暑い。

私は、帽子を被ってくれば良かった・・・と思いながらコンクリー
トの上を歩いた。

・・・ちなみに、ゴミ捨て場は、家から500メートルぐらい先の
所らしい・・・。

(何で、そんな遠いところにあるのかなあ・・・)

前に住んでいた家では、すぐ目の前にゴミ捨て場があった為、そんな風に思う。

それでも、行くしかないなので私はよろよろとゴミ捨て場に向かった。

・・・ゴミ捨て場が向こう側に小さく見えて、私は「やっと着いた・・・。」とほっとした。

少し汗ばんだ足元が自然に早くなっていく。

・・・と、その時、後ろから、車の走ってくる音。

そのまま、私の横を通り過ぎる。

・・・残ったのは強烈なごみの臭いと、排気ガス・・・。

・・・って事は・・・。

(・・・今の、ごみ収集車?!)

通りすぎた後に気づいた私。

前を見ると、すでにごみを回収していて、もう終わる感じだった。

「・・・ちょ、ちよつと、待って下さい!」

そう叫んだが、車のごみを潰していく音でその声のごみ収集車の人に届く事は無かった。

「あのっ!」

さらに大声を張り上げ様とした、その瞬間、違う声が後ろから聞こえてきた。

「その車ー! 待てー!!」

・・・少しかすれた様な声。声変わり中っぽい感じ。

・・・何て考えていたのも束の間。

その人は私を通りこして走っていった。

・・・つられて、私も走り出す。

私達の存在に気づいてくれたのか、ごみ収集車の人がかつちを振り向いた。

「・・・これ! ごみ!」

その人・・・というか、男の子がぶっきらぼうな言い方をして、ごみ袋を差し出した。

その言い方が何と無く可笑しくて、ちよつと噴出しそうになる。

でも、そうもいつてられない!・・・私もやってきて、

「・・・こつちも、ごみです!」
と言った。

ちよつと緊張した言い方になってしまったが、ごみ収集車の人は、
「はい、どうも。」
と言って、ごみ袋を受け取ってくれた。

・・・車はまた他のゴミ捨て場に行ってしまったて、残ったのは、ご
みの臭いと排気ガスと・・・もう一人の男の子・・・。
・・・別に知らない人だけど、何と無く気まずいフィンキ・・・。
・・・思っていたら、男の子はこっちを振り向いて、
「アంతາ誰？」
と聞いてきた。

(・・・え、ど、どうしよう！)
いきなり聞いてきたので、緊張する私・・・。
でも、とりあえず

「・・・あ、ああ、あの、私、この地方に引っ越してきた者です・・・っ！」
と、カチンコチンになりながら言った。

男の子は

「・・・緊張しすぎじゃん。」
と一言突っ込んで、また走って行ってしまった。

・・・私は、ただ、男の子の後ろ姿を見ながら、「・・・何だったんだろう・・・。」と呟いた。

・・・そう、これから起こる事も知らずに。
もう、話す事も無いだろうと思っただけだった。

第五章 野球ボールと夜の公園（前書き）

・・・すいませんっ!!!><

この前の章では、「次回予告です」・・・なんて、調子乗った事を書いておきながら、全然違う感じになってしまいました！（；；；）

本当にすいませんでした！

・・・それでは、もし、読んでいって頂けると、本当に本当に嬉しいです！

ほんと、すいませんでした・・・><

第五章 野球ボールと夜の公園

・・・目覚ましのけたたましい音が、私の耳元でジリジリと鳴り響く。

「・・・・・・・・。うん・・・・・・・・。」

あまりのうるささにさすがの私も目を覚まして、それからスイッチを切った。

それからもう一度寝ようと思って、布団の中に潜り込む。

・・・そしてそのまま深い眠りにおち・・・

「涼香ー！ー！！・・・ちよつと降りてきてー！ー。」

・・・何てタイミングの悪い声・・・。

お母さん、何で今なんだ・・・。

そう思いながら渋々階段を降りて行く。

リビングに着くとお母さんがいつもと違う服装をしていて、香水の匂いをプンプンさせていた。

「・・・・・・・・何、話って・・・・・・・・。」

不快感を思いっきり漂わせた声で聞いてみる。

すると、お母さんが

「はい。」

と行って何かを渡してきた。

・・・それは一枚の白い紙だった。

「・・・・・・・・これ、宜しくね。お母さん、今から仕事行くから。」

・・・渡された紙には、黒い字で「児童講習会」と書いてある。

「……………」

頭の上にハテナマークを浮かべながら首を傾げるとお母さんは、
「……満の塾の講習会よ。……涼香、今日暇でしょ？」
と言った。

……ちなみに、満みちるというのは私の弟だ。
今、中学一年生で「孔明琴金」（ことうめいきんじゆく）という偏差
値70ぐらいの頭を持った人達がぞろぞろしている所に行っている。
（私達は略して「孔塾」と呼んでいる。）

「……………え……………。塾の講習会って……………。しかも孔塾で
しよ……………」

露骨に嫌そうな顔をしながらそう言ってみる。
お母さんはそんな私を見てこんな提案を出した。

「大変だろうけど、お母さんも今日用が入っちゃったのよ……………
……あ、そうだ、ちゃんと聞いてきてくれたら帰り道に何か買って
きてあげる。」

……私の耳が小さく動く。

お母さんはその瞬間を見逃さなかった。

「……………。それじゃあ、涼香。お母さんはもう出るから。朝ごはん
は適当に自分で作って頂戴ね。」

そう言うときさっさとドアを開けて外へ出て行ってしまった。

（「うん」なんて言って無いのに……………）

そう心の中で文句を言いながら、とりあえず今貰った紙に目を移す。

「集合場所は孔明金塾です。13:30 16:30まで行いま
す。」

その文字と一緒に小さな地図がそえてある。

……「あ……………」

ため息に近い声で一人、呟いてみた。

それから近くにある椅子に座り、傍にあつた食パンに手を伸ばす。
「何たつてこんな休日に塾に行かなきゃ行けないわけ……?」
誰も聞いてはいないけど、そんな言葉を発してみた。

でも、お母さんがいない今、そんな事を言つたつて何にも変わり
はしない。

私は仕様が無く……いや、強制的に塾に行く羽目になつた……。

……

……ちろりと時計に目を向けると、長い針は12を、短い針は
11を指していた。

(そろそろ、出ようかな。)

そう思った私は外に出て、薄い青の自転車に跨る。

それから、ほんのり湿気を含んだ春の風を切り裂く様に、ペダルの
スピードを上げていった。

……孔明金塾は隣の市にあり、自転車で駅まで大体15分、電
車に5分乗つて後は徒歩10分程度の場所にある。

そこに毎週五回も行き始めた弟は、すでに中2の私の上の、さらに
上の学年の勉強までしているらしい。

この前、ちよつとテキストを覗いてみたが、やはりチンプンカンプ
ンな内容だった。

それなのに、何故か弟はスラスラその問題を解いていき、

「こんなの基礎中の基礎だつて。」
何てほざきやがっていた。

……全く持つて、嫌味にしか聞こえないその言動に、私は

「人生、勉強ばつかじゃやっていけないよ。」

と、ちよつぱり負け犬気分を味わいながら言つてみた記憶がある。

・・・何て考えている内に、さっきまで静かだった道から、少しずつ人の声の混じった道に変わっていた。

・・・さらに進んでいくと、より音が濃くなり、人の量も増えていった。

これ以上ペダルをこいでいると人を引いてしまいそうな気もしたので、私は自転車を降りて近くの駐輪場に止めた。

それから、駅に行つて、切符を買い、電車に乗り込む。

しばらくすると、「 駅 駅 お出口は右側です。 ・ ・
ご乗車、有難うございます・・・」

という駅員さんのアナウンスが流れて来た。

電車から降りた私は、小さな人ごみの中をくぐり抜けて、外にでた。

電車の中とは違う、爽やかな空気を肺いっぱい吸い込んで、私は孔明金塾まで歩き始めた。

・・・私の目の前に、「孔明金塾」と筆の様な字で書かれた看板が立ちはだかる。

(・・・やつと、着いた。)

私はそう安堵の溜め息を吐いて、少し重たいドアをゆっくりと押した。

.....

「保護者の方々、本日はお集まりいただき、有難うございました。これからも、お子様の勉強を・・・」

・・・塾の先生の話しがやっと終わり、私はこれで16回目となるあくびを一つした。

時計を見ると時刻はピッタリ16:30。
さすが、という感じだ。

私は、せつかくの休日をこんな形で終わらせてしまった事に小さな溜め息を吐きながら、行きと同じ様に重い扉を押した。

外は、綺麗な夕焼け空が広がっていて、まるで私の疲れを癒すかの様に太陽の光が優しく照っていた。

・大きく大きく伸びをした後、私はのんびり歩き出した。

電車に乗り込んだものの、出発するまでもう少しかかりそうだったので、窓越しから空を見てみた。

少しずつ暗くなっていく空の色がとても綺麗で、その絶妙な色合いに、目を奪われた。

それから、確かこういう瞬間の空の事を、「ゴールデンアワー」というと、昔誰かが言っていたのを思い出す。

その瞬間は、一日に一回しか無くて、それもたったの数分で、だけど、確かに存在するものなのだと言ってもいい。

・そんな事を思っていると、電車の中に駅員さんの声が響いた。

「誠に申し訳ありませんが、ただいま、ふみきり付近で不審な行動をした人物が居る、という様な情報が入った為、発車時間の変更されました。ただちに　　の　　号が見に行きますので、今しばらくお待ち下さい。・皆様の貴重なお時間を取ってしまう事を・
」

それを聞いた私は、ケイタイを開いて、

「電車が止まったので少し帰ってくるの遅いかも。」
と、簡潔な文をお母さんに送った。

そしてまた、視線を空に移した。

・・・しばらくしてから、また駅員さんの声がして、電車はやっと動き始めた。

私はもう一回お母さんへ

「今、動き始めたから。」
というメールを送った。

・・・空はもう暗くて、さっきまでの美しい色も、優しい太陽の光も、暗闇に包まれていた。
だけど、所々に星がパラついていて、それもまた、さっきとは違う美しさがあった。

どこの家からも、オレンジ色の光が灯っていて、何と無く、早く家に帰りたくなった。

・・・人混みと一緒に電車から降りて、私は少し足早に駅を出て、自転車を取りに駐輪場へ向かった。

・・・自転車を取って、少しこいで行くと、さっきまでのにぎやかさはなくなっていて、私は少し心細くなりながらペダルを強く踏んだ。

・・・誰も居ない、暗い道路。

それとは反対に、近くの家々からは明るい笑い声が家越しにかすかに響いていた。

・・・そんな笑い声を背にどんどん進んでいく。

公園まで来た時に、その声とは違う音が私の耳に飛び込んできた。
・・・おそらく、それはボールの音だろう。

ポーン、ポーンと、一定のリズムを刻み、絶える事無く投げつづ

けている様だ。

（誰が、投げているんだろう・・・？）

少し気になって、何と無く身体が公園の方へ向かう。

自転車を止めて、音の方向へ歩いて行った。

・・・音の正体は、歩き始めてからすぐに見つけられた。

・・・その人は、電灯の明かりの下で、小さなボールを投げている。
た。

手にグローブをはめて、振りかぶり、しなやかに腕を滑らせては、指先からボールを放つ。

・・・ボールは、まるで生き物の様に指先から飛び立ち、真っ直ぐに空を切り、壁に反射して、また、グローブの中に納まる。

それを何回も何回も繰り返して、・・・それでも休む事無く同じ様に空を切り裂いては、壁に反射して、グローブの中へ滑り込んで行った。

・・・私は、ついその動きに見とれて、その場に立ち竦んでいた。

・・・夜の公園の、電灯の下で、私はその人のフォームに目を奪われていた。

・・・そして、これが、これから芽生える想いの、最初のきっかけ。それは、まだ、桜が散り始めた春の出来事。

まだ、「恋」を知らない、中学二年生の頃。

第五章 野球ボールと夜の公園（後書き）

・・・すいません、最後の方、けっこうムリヤリ終わらせた感じになってしまった気も・・・（汗）

・・・とりあえず、次の章こそは、恋愛ものっぽくしたいです>><<ここまで読んで下さって、本当に・・・っ！有難うございました！！

第六章 二度目の再開は・・・(前書き)

更新、遅くなってしまいスイマセンm()m
それから、今回は結構短いかもです！

こんなヘツポコ作文ですが、読んでいって頂けると本当に嬉しい
です!!!

第六章 二度目の再開は・・・

・・・夜の公園。

音。

野球。

ボール。

電灯。

帽子。

様々な言葉が私の頭の中に飛び交っていく。

・・・それもその筈。

さっきまで壁当てをしていた人が、こっちに近づいて来ているのだから！

・・・しかも、その人は私の存在に気が付く様子も無く、タオルで顔を拭きながら近寄ってきている。

・・・よく見ると、「その人」は、少年の様だ。

しかも、私よりも背が小さいときた。

（・・・男の子？ー・・・てか、この状況、結構ヤバいんじゃない！??）

・・・そうなのだ。

男の子はこっちに近づいて来ているし、私はこの場から速やかに退散しなければならぬ。

そんな男の子に関して分析している場合では無かった。

とにかく私は逃げようと思い、足を公園の出口の方へ動かした。

・・・ザッ・・・

とっさに足を動かした為、地面の砂に足が擦れて、けっこう大きな音を立てた。

(わ、最悪！何で音なんかたっちゃうわけ?!)

しかも、その音に反応して男の子がタオルの合間から顔を出す。私も身体を硬直させたまま男の子の方をソロリと見た。

・・・と、その時、丁度男の子と目が合ってしまった。

(・・・ぎゃっ！目、合っちゃったよ！・・・て、・・・え、・・・あれ?)

男の子の、顔。

それはどこかで見たことのあるものだった。

自分の脳みそをフル回転させて記憶を遡る。
それと同時に男の子の目を背けた。

塾の講習会――

朝――

夜――

お母さんに頼まれて――

ごみ捨て場――

男の子――

そこでピタリと記憶をとめる。

(そうだ、この子はー。)

「ゴミ捨て場のー」

そういつた瞬間、自分の声とは違う声が混ざっている事に気がついた。

顔を上げると、また前にいる男の子と目が合って、お互いフリーズ状態に陥ってしまった。

――

「……お前、何でこんな所とこいんの？」

そう話しかけてきたのは男の子。

・それでも、まだフリーズ状態な私は無言のまま男の子を見つめていた。

(……ど、どうすればいいの？と、とりあえず、返事した方が良い……よね?)

必死に返事をしようと言葉を探すが見つからない。

私は口をパクパクしながら男の子の方を見た。

・じつと私の方を見つめる瞳。

私の緊張が加速して自分の心臓を揺さぶった。

「……え、あ……」

・ほんの少しの小さな声。

それが今の私が出せる最低限の大きさだった。

「・・・は？何か言った？」

男の子はそんな私の気持ちなんて全く考えずに眉を寄せて耳を傾けて来た。

「いや、だから・・・」

さっきよりはだいぶ大きな声で言うが、それでも、普通の声の三分の二くらいしか音量はでなかった。

「・・・もちっと大きな声でいえよ。聞こえねーだろ？」

男の子が言う。

そんな事言われたって、こっちも大変なのだ。

「え、えっと、だから・・・、何ていうか・・・」

私がモゴモゴしながらそう言う。

男の子は、

「あぁ、もう、早く言えよ」

と、ちよつとイラついた声で言う。

(・・・あー。もう、どうすれば良い訳?!理由なんか無いしっ!知らないよ!もう!)

私は心の中でそう言った。

勿論、聞こえるわけも無いのだが。

「・・・や、もう、ほんと何でも無いんです、はい、それじゃ！」

半分は混乱状態、

半分はヤケクソ気味の私はそれだけ言って、ダツシユで自転車に跨り、そのままペダルを思いっきり踏んで、逃げた。

「・・・は？」

後に一人残った男の子のその声だけがちよつとだけ私の耳に届いたが、気にせずそのまま夜の道路を走った。

第六章 二度目の再開は・・・（後書き）

・はい、いきなりですが、本当に凄い駄作っぷりだな、と自分で描きながら思いました。

ロマンチック要素、全然無かったんですが、どうしましょう？（知らねえよ。）

これ、本当に恋愛物になるのか、ちょっと不安になってきました（*ー*；）

・ここまで読んでくださった貴方、毎回いってますが、本当に有難うございました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1671n/>

夜空の下で君が。

2011年10月7日18時00分発行